

[書評]

三谷恵子著『スラヴ語入門』  
(三省堂、2011年、208頁)

森田 耕司

これまでスラヴ系諸言語の特徴を、短い分量で具体的かつ包括的に知るのに非常に重宝していたのが、三省堂の亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典』の「世界言語編」第1～4巻(1988～1992年)である。その後さらに、この多巻物大辞典より、ロマンス諸語、ゲルマン語派、スラヴ語派を中心に収載した分冊版である亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典セレクション：ヨーロッパの言語』(1998年)が出版されたおかげで、これ1冊で『言語学大辞典』のスラヴ系諸言語のすべての項目に触れることができるようになった。このような質量ともに空前の規模の言語および言語学の百科全書を出版することにより、言語学界に金字塔を打ち立てた三省堂がこの度世に送り出したのが、三谷恵子著『スラヴ語入門』(英文タイトル：The Slavonic Languages: A Primary Guide)である。まもなく町田健著『ロマンス語入門』や清水誠著『ゲルマン語入門』の続刊が刊行されたことから、上述の『言語学大辞典セレクション：ヨーロッパの言語』からの流れを汲み、今回はさらにロマンス語、ゲルマン語、スラヴ語といった言語グループごとに、より細分化された手頃な分冊を出版するという新たな方針が窺える。

本書の著者である三谷恵子氏は、南スラヴのクロアチア語および西スラヴのソルブ語に関する研究で最も多くの業績を有し、現在日本のスラヴ語研究において第一線で活躍している言語学者の一人である。したがって、『スラヴ語入門』というスラヴ語世界全体にわたる広範な知識と教養が要求される入門書の執筆という重責を担うことのできる人物として、三谷氏が選ばれたことは必然のことであろう。

さて、本書の構成はというと、まずスラヴ語の翻字法その他の紹介から始まり(3～8頁)、第1章「スラヴ語の特徴」(9～49頁)、第2章「スラヴ語の文字文化」(50～61頁)、第3章「現代スラヴ語各説」(62～164頁)を通して、スラヴ語全般の歴史、現代スラヴ語の基本的特徴、スラヴ語初期の文字文化、個々のスラヴ語の文字と発音を解説し、第4章「スラヴ語と現代社会」(165～186頁)では、一般的な入門書や文法書には出てこない現代スラヴ語に関する、著者の言葉を借りれば“隙間的”な事情をいくつか紹介し、そして最後の第5章「図書案内－さらに詳しく知るために」(187

～191頁)で締めくくるかたちになっている。巻末には「人名一覧」(193～200頁)もあり、各言語の歴史の中で言及された人名、および第3章「現代スラヴ語各説」のそれぞれの言語の解説の最後に設けられている「地名・人名の読み方」に挙げられた人名が生没年や職業名とともに、一覧表のかたちで整理されている。

まず本書の目次を見て気になったのは、カシュブ語が西スラヴ語群の中に、ポーランド語やチェコ語などと同等のレベルでリストアップされていることである。今日でもポーランドの言語学者の中にはこの言語をポーランド語の方言、つまりカシュブ語ではなく、カシュブ方言と考える意見が多く、論争が未だに続いている。この言語は以前から様々な方言変種として機能してきたもので、現在のところ、まさに標準語化が行われている過程にある。したがって、カシュブ語をスラヴ系の独立した1言語、つまり個別言語として記述する場合には、その言語学的根拠を示すことによって、自らの立場を表明する必要があるのではないだろうか。19世紀後半から行われてきたカシュブ語(方言)の研究史を振り返ると、この言語のスラヴ系諸言語の中での位置づけとポーランド語との関係については、大きく分けて次の三つの立場がある。一つ目は、系統的にはポーランド語に最も近いけれども、独立したスラヴ語であるとする立場。二つ目は、その周辺の位置づけのため標準ポーランド語からは最もかけ離れているが、やはりポーランド語の方言であるとする立場。三つ目は、レフ語群の中の一派で、北西部の言語(死語となった西ポモージェ諸方言やポラブ語)と南東部の言語(ポーランド語)の中間言語的な性格を持つ方言であるとする立場。しかし、本書のカシュブ語の部分には、ポーランド語との音韻上の相違点は若干紹介されているが、この言語を方言ではなく、個別言語であるとみなす著者による明確な根拠は見られない。確かに、本書95頁や111頁に書かれているように、カシュブ語は現在、ポーランド国内の「地域言語」(Język regionalny - 森田)と位置づけられており、少なくとも法的にはポーランド語の方言ではないことになる。ただし、この「地域言語」のステータスは、話者の意思や政治的な影響に左右されることが多く、必ずしも言語学的な根拠に基づいて与えられているわけではないことを忘れてはならない。ちなみに現在、ポーランド国内では他に、南部のシロンスク方言の一部の話者たちが以前からこの「地域言語」のステータスを得ようという動きに出ているが、今のところ実現には至っていない。話者の人口や個別言語とみなすための言語学的根拠は、カシュブ語と並ぶほど多く存在するが、政治的な障壁が高く、実現への道のりはまだまだ長いといわざるを得ない。もし法的な根拠のみで個別言語とみなすのであれば、シロンスク方言も「地域言語」、つまり「シロンスク語」とみなされた暁には、今回のカシュブ語のように西スラヴ語の1言語としてリストアップされるのであろうか<sup>1</sup>。

また、言語のステータスに関してさらに述べると、本書ではスラヴ語圏のマイクロ標準語<sup>2</sup>の代表格であるルシン語は東スラヴ語の1言語として、ロシア語、ウクライナ語、

ベラルーシ語と並んでリストアップされているが、それに対して、同じくミクロ標準語の代表格とされるブルゲンラント・クロアチア語は南スラヴ語のリストには上がっていない。現代スラヴ語としてのこれら2言語の取捨選択の基準は何処にあったのであろうか<sup>3</sup>。

次に注目したのは、第4章「スラヴ語と現代社会」で紹介されているトラシャンカとベラルーシの言語状況についてである。著者によるとベラルーシでは、標準語としてのベラルーシ語が実質的にほとんど機能しておらず、人々が実際に用いる言語は、ロシア語か、ベラルーシ語の方言、さもなくばトラシャンカであるということで、173頁にその状況を図式化しているが、これでは完全に標準語としてのベラルーシ語の存在を無視したかたちになっており、過度な一般化が感じられる。確かに、現在のベラルーシの政治状況では司法、行政、高等教育、学術などの重要な社会領域においてロシア語使用が圧倒的で、ベラルーシ語の使用領域はかなり限定されているが、それゆえに自分たちがベラルーシ人であると見なすための民族的アイデンティティの指標やシンボルとしてのベラルーシ語の新たな役割が表面化しつつあることに注目すべきである。本書では社会言語学的な見地からの記述はあまりなされていないが、トラシャンカはその語源<sup>4</sup>からもわかるように、主に村から大都市へ仕事を求めて出てきた社会的地位の低く教養のない農民階層の人々が、持ち前のベラルーシ語方言の音声と文法にロシア語の語彙を混ぜて使う「田舎くさい」イメージがある、いわゆる「農村型」言語のため、社会的地位の高い教養のある大都市の知識人たちは、標準的なロシア語やベラルーシ語といった「都市型」言語を使用する傾向にあることも指摘しておく必要があるだろう。実際、評者がベラルーシ西部のある村でフィールド調査を行ったときも、多くの住民が口をそろえて「ベラルーシ語とは非常に教養のある人々が話す言葉だ」と答えていたことから、ベラルーシ語が村の日常会話の言語としてではなく、高い社会的地位や豊かな教養と結び付いた言語として人々に認識されていることがわかる<sup>5</sup>。そういった認識や先に述べたベラルーシ人としてのアイデンティティを形成・維持する機能が、今後の標準ベラルーシ語の「復権」のプロセスにおいて重要な役割を果たしていく可能性も示唆しておくべきではないだろうか。

ところで、話は変わるが、そもそも本書は、「はじめに」にある次の引用部分からも、専門家ではなく、一般の読者を対象に執筆されたものであるということがわかる。

スラヴ語といえば「変化表」。ロシア語なり、ポーランド語なりの学習書を開くと、名詞の格変化や動詞の人称変化など、変化形ばかりが出てきて、それだけで気後れしてしまう、そんな経験のある方もおいでかもしれない。スラヴ語の世界に本格的に足を踏み入れるためには、変化形をよけて通るわけにはいかないが、本書では、詳しい文法事項には立ち入らない。まずは、スラヴ語とはどんな言語なのか、どの

ような文字を使い、それをどう読むのか、またこれらの言語は、どんな歴史をもち、互いにどう関係しているのか、そういったことの概要を知っていただくことを目的としている。

上記の著者の執筆方針にしたがって、第1章「スラヴ語の特徴」では、スラヴ語を理解する上で不可欠な「文法的性」、「格」、「活動体と不活動体」、「体（アスペクト）」などの重要な文法項目が、対照表や例文を使って分かりやすく紹介されており、キリスト教を軸にスラヴ語世界の歴史的経緯を分かりやすく描いた第2章「スラヴ語の文字文化」とともに、多様性と類似性に基づいたスラヴ語世界の面白さが、本書の中で最も明快に記述されているように思う。

しかしながら、一般の読者のために難解で複雑な文法事項を最小限に抑えようとした著者の配慮にもかかわらず、本章（並びに本書）の記述には読者を惑わせる誤植が若干見られる。再版の際には訂正を期待したい。また、第3章「現代スラヴ語各説」では、著者の執筆方針にしたがって詳しい文法事項の説明は省略され、個々のスラヴ語の文字と発音を紹介することになっているが、実際には一般の読者に向けた文字の解説や発音の仕方などの説明はほとんど見られず、アルファベットの一覧表と一般の読者には難解で複雑な音韻体系などの理論的な解説に終始していることも、本書の冒頭に述べられた執筆方針とやや矛盾しているように思われる。

本書を一読することにより、スラヴ語世界のすべてを一般の読者に向けてバランスよく平易に記述することが、想像以上に困難なことであるということを肌で感じることができ、評者自身学ぶところも多かった。逆にいうと、それは著者が本書冒頭の「はじめに」で述べているように、「それぞれのスラヴ語には独自の個性があり、互いに似ているようで、微妙に、あるいはかなり異なる面がさまざまにある」からである。特に語彙については、スラヴ語間には様々な「罨」が仕掛けられており、同じ語源の語彙でも意味がかなり異なる場合が多い。著者も「はじめに」で、ポーランド語では *godzina* は「1時間」だが、セルビア語／クロアチア語で *година/godina* は「1年」になるため浦島太郎になってしまうという例などを挙げているが、本書中からも簡単な例を拾い上げてみると、チェコ語では *dívka* は「少女」（125頁）だが、そのすぐお隣のポーランド語で *dziwka* という「売春婦」になってしまうように、著者が例に挙げている浦島太郎程度では済まないようなとんでもない誤解を生み出す語彙の「罨」も、スラヴ語世界全体を見渡すとかなりの数に上る。したがって、スラヴ語世界を扱う際には大胆さと細心さを併せ持つことが必要なのである。

すでに述べたように、本書には解決しなければならない問題が少なからず残されているものの、一般の読者にスラヴ語世界の多様性や類似性を分かりやすく、興味深く伝えるという難題解決への一つの試みとしては高く評価でき、日本では類書がない貴

重な1冊といえるであろう。

【註】

<sup>1</sup> シロンスク方言に関する議論については、例えば、ヨランタ・タンボル（関口時正訳）「上シロンスク人の言語とエスニック・アイデンティティ」『西スラヴ学論集』2011 / vol. 14、6-29頁を参照。

<sup>2</sup> 「スラヴ標準マイクロ言語」の定義については、Александр Д. Дуличенко, *Славянские литературные микроязыки. Вопросы формирования и развития*, Таллин 1981などを参照。

<sup>3</sup> ちなみに、本書と同時期にポーランドで、*Słowiańskie języki literackie: Rys historyczny*, pod redakcją Barbary Oczkovej i Elżbiety Szczepańskiej przy współpracy Tomasza Kwoki, Kraków: Wydawnictwo Uniwersytetu Jagiellońskiego 2011が出版された。本書はスラヴ諸語それぞれの標準語の形成過程をまとめた概説書であるが、三谷氏の著書のように東スラヴ語にルシン語がリストアップされているだけでなく、南スラヴ語の中には、三谷氏が挙げた7言語に加えてさらに、このブルゲンラント・クロアチア語も取り上げられている。

<sup>4</sup> トラシャンカ трасянка は、動詞 трэці (ベラルーシ語) / трясти (ロシア語) 「<干草などを>かき回す」が語源で、牛の餌となる新鮮な牧草と干草の低品質な混合物を元来意味する。

<sup>5</sup> 詳細については、Koji Morita, *Przemiany socjolingwistyczne w polskich społecznościach na Litwie (region trocki) i Białorusi (region iwieniecki). Studium porównawcze*, Warszawa: Instytut Sławistyki PAN, Sławistyczny Ośrodek Wydawniczy 2006などを参照。